

# 災害復興における民族スポーツ

—新潟県山古志・小千谷地区の牛の角突きに着目して—

スポーツ文化研究領域

5012A047-4 藤野 功

研究指導教員：寒川 恒夫 教授

## 1. 研究目的・背景

災害被災地域における復興過程において、その地域で伝承されてきた民族スポーツや祭事などが「復興のシンボル」とされることがある。新潟県長岡市山古志地区、小千谷市東山地区では、新潟県中越地震からの復興において「牛の角突き」という、牛同士を戦わせる闘牛行事がその役割を担い、震災の翌年には行事が再開されている。

そこで本研究においては、角突きを事例に、その社会的・文化的背景を踏まえた上で、災害という外的要因及び復興という特殊な環境下による変容を詳らかにし、被災後における当該行事の再開に与えられた意義を明らかにすることを目的とする。

## 2. 新潟二十村郷における牛の角突きの歴史的・文化的背景

角突きは二十村郷における数少ない娯楽として楽しまれてきた。しかし、二十村郷を巡る経済の論理や、行政による風俗統制によって、消滅と再開を繰り返すことになった。その過程で角突きは「伝統」と「観光」という論理を身に付けることによって、行事存続の正当性を確保したことについて言及した。つまり、これまでの先行研究で指摘されていたよう

に、民俗行事が存続のために「観光化」し、「伝統性」が強調されるという動態が、角突きにおいても起きているということが明らかになった。そして、その「伝統」に対する認識の違い、「観光化」において志向した角突きの見せ方の違いから、二十村郷の角突きが、「伝統」を変容させていくことを厭わない山古志の角突きと、「伝統」を守ることに固執する小千谷の角突きという二つの角突きへと分節化したことを明らかにした。

## 3. 震災による角突きの変容

角突きの変容について、角突き牛、闘牛場、角突きをめぐる共同体、牛舎という4つの項目に分類し、山古志・小千谷間の地域間の差異を抽出した。その結果、山古志においては、震災以前から「伝統」を変容させることに寛容であったため、それぞれの項目においてドラスティックな変容がみられた。その要因としては、四股名の変容のように、観客を楽しませるためのものもあれば、大会運営における外部団体の受け入れや共同牛舎によるという変容のように、角突きの維持のためにやむを得ず行ったものもある。その中でも、牛の一括管理という変容は、自らのステータスを牛によって表すという彼らが角突きに求める楽しみの本質に関

わる問題であったが、それに代わる楽しみを、観客にいい角突きを見てもらうという全体性の中に見出していることが明らかになった。

小千谷においては、彼らの「伝統」を維持しようとする態度により、その「伝統」が危険にさらされるような変容は行われなかった。特に、共同牛舎方式で角突きを再開させても意味がないという担い手たちは、個人牛舎で牛を飼うという「伝統」を守ることに強いこだわりを見せた。彼らはこの慣習を守ることによって、娯楽としての角突きの本質が保たれ、角突きの担い手が再生産されるという機能を知覚した上で、この個人牛舎における牛の飼育という「伝統」を維持していることが明らかになった。そして、彼らは変容したものとして、唯一闘牛場の変容を挙げる。これは、闘牛場の施設の変容が角突きの「伝統」に関わるものではないと彼らが捉えていたからだと考えられる。

#### 4. 牛の角突き再開の意義

中越大震災における角突きの復興過程を整理し、担い手たちの生活再建がままならない状況の中でも、双方の角突きが早急に再開への合意形成がなされ、翌年には角突きが再開されていることについて言及した。この復活した角突きは「復興のシンボル」と表象され、多くのメディアから、地域住民が震災を乗り越えて継承している「伝統」として注目されるようになる。そして、担い手たちもそれに応えるように、角突きの復活は「伝統」を守るという社会的意義があるものと喧

伝をしていることについて指摘した。また、行政からも「伝統」と「観光」という文脈の中で角突き再開への意義が見いだされた。担い手たちからの聞き取りにおいても、「伝統」を守ることの重要性が語られ、その根拠として、角突きが伝承され続けることによって、担い手たちの関係性が保たれ、それが地域に人を繋ぎとめているという機能が語られる。つまり、彼らが震災からの再開過程において経験した事象から、角突きが地域の紐帯を強化するという機能を担っていることを知覚していることが明らかとなった。しかし、彼らの語りの曖昧さや、他の担い手の証言により、彼らが角突きを復興させた意義の根底には、「娯楽」に対する希求があったことを指摘した。つまり、彼らは、災害からの復興過程において、「娯楽」を再開させることに抵抗を感じ、それを打ち消すために、外部からのまなざしに対しては、戦略的に角突きの社会的意義を語っていたということが考察された。

#### 5. 結論

山古志・小千谷の両角突きにおいて、それぞれ、「伝統」を積極的に変容させて角突きを守ろうとする態度と、「伝統」を保持することで角突きを守ろうとする態度の違いから、災害からの角突きの復興において、全く違った動態が示された。そして、彼らが角突きを守る理由は、他でもない「娯楽」への希求であるということが明らかになった。